

30	29	28	27	26	25	24
悪霊の午後	つむじ風	ひとひらの雪	光の肌	秘書	うちの社長	老人の眼
遠藤周作	梅崎春生	渡辺淳一	佐野洋	工藤幸一	源氏鶏太	城山三郎
南条英子	埴佐和子	相沢笙子	野上美樹子	絹子	関口高子	秋山ミドリ
東京 男性作家	東京 男性作家	東京 建築事務所	東京 大武通産	建設会社	東京 麻布産業	S市 北国デパート
作家個人	作家個人	所長	専務	秘書課	社長	秘書課
作家の教え子の紹介	新聞広告に応募、採用	工務店にいる知人の紹介	高校の友人の世話でMデパートから転職			定期移動で紳士売場から
新人		4年		長い	2年	
58・	31	56 ～ 57	39	56	37 ～ 38	34
講談社	梅崎春生全集	文春	徳間	『一人のめぐり』	角川	新潮

	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
	秘書室	庶務課長	広報室沈黙す	寝台特急北斗星 殺人事件	非常階段	黒い船渠	眩い巨塔	横領	銀行派遣役員	銀行破産	濁流の花	あいつも隠した
	渡辺一雄	咲村観	高杉良	斉藤栄	梶山秀之	梶山秀之	梶山秀之	広瀬仁紀	広瀬仁紀	広瀬仁紀	黒岩重吾	黒岩重吾
	林田 伊藤陽子 加賀爪佐保子 細田弘子 金本起代子	安田貴子	中川玲子 三原伸子 久山紀子	塚本邦代	戸田克子	長谷川みどり	松方則子	奈良原静香 宮沢祐子	片山眞理子	尾崎敏子	矢奈瀬久美	毛利鈴江
	東京 杜下商事	神戸 支店近畿運輸開発	東京 世紀火災海上保険	東京 石田運輸大臣	東京 トラブル・コンサルタント 事務所	神戸 世界造船	東京 太陽社	東京 栗田口・リサーチセンター 東京 三洋建設	東京 朝日銀行	東京 三國物産	東京 松井建設	横浜 貿易会社
	専務 社長 副社長	支店長	会社 社長 副社長	大臣	所長	専務	社長	所長 社長	会長室	秘書室	秘書課 社長	社長
	日本秘書学院院長紹介				所長が前勤務先から引き抜く	外国語の会話力を買われて伯父なる専務に乞われた		栗田口の友人の助教授の紹介 知人の紹介				新聞広告で募集した中から社長の採用
	日が浅い		10年 4年 以上					3年 2年		3年	7年 8年	新人
	54・	57・	58 59	63	39 40	38 39	39・	56	53・	53	59	37
	徳間	徳間	講談社	ケイブンシャ	角川	集英社	徳間	角川	徳間	徳間	角川	集英社

	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No
	翳りある微笑	巨きな歩	冷血集団	湿地帯	敵意の環	歪んだ札束	狂謀 ディスカウントの	凶悪のラストベッド	離れ棲	成り上がりの勲章	マッハの謀略	小 説
	黒岩重吾	清水一行	清水一行	清水一行	清水一行	門田泰明	門田泰明	門田泰明	門田泰明	門田泰明	門田泰明	作 家
	田上みどり	恭子	岡本恭子 久保田里美	吉倉つや子 石井恵子 坂谷芳江	北村杏子	日高	藤原治子	池上京子	下条陽子 村野厚子	岡井陽子	細川京子	女性秘書
	宝塚 ホテルボヘミアン	東京 姫野紡績	東京 タカシマ工業 東京 経営研究所	東京 大同銀行	東京 共和商事	東京 正和相互銀行	東京 南部ストア	東京 ラ・セオーム	極洋電機	大阪 ゴールドベアーズ・フーズ	東京 極東重工業	勤 務 先
	社 長	秘書課	社 長	秘書室	部 長	社 長	社 長	社 長	社 長	専 務 社 長	社 長	専 属
	秘書募集の新聞広告に 応募、採用									経営企画室から突然抜 擢		就 任 事 由
	3年 あしかけ			6年 ぐらい			8年	13年		6年		秘書勤務
	38	47	57	60	52	55	56	60・	60・	60・	60・	小説の初出年 *初版刊行年 (昭和)
	文 春	角 川	集英社	集英社	集英社	徳 間	徳 間	徳 間	徳 間	徳 間	徳 間	使用テキスト (文庫他)

G 複写機、通信機、その他の事務機器の知識をもっていること

H 経営者個人の私設金融相談役であること（経済的知識・税務知識）

I 整理の能力にすぐれていること（特にファイリング）

右のような規定が現実のものかどうか、女性会員をも含んでいるものかどうかははっきりしないが、これらすべてを備えることが最高の秘書能力であることは相当まで納得できる。

おわりに

今回調査した三十篇の作品中、はっきりと女性秘書が主人公となっているのは、次の三篇である。

『凶悪のラストベッド』 池上京子

『光の肌』 野上美樹子

『秘書室』 加賀爪佐保子

調査した作品中には、色どりと名をあげているだけで、秘書にこれといった役割を与えていない『庶務課長』の安田貴子や『離れ棲』の下条陽子、村野厚子のような例もあるが、しかし作品中主人公とされている前の三篇の女性秘書は十分に重い役割が荷なわされている。

前回と合わせると合計五十三篇を調査したことになり、女性秘書の実例をかなり見ることが出来た。これから秘書小説における女性優位の現象は続くことと思われる。今後ともその内容に注目していきたい。

この小論は前回のつづきとして、全く同じ方法をとって調査しまとめたもので、小説の作品論や文芸論には殆んど立ち入らなかった。それは別の機会に譲りたい。

終りに、数量化できる項目についてのデータを、前回分と合わせて載せることとする。小説家はそれぞれに多様な秘書像を造型しているがこのデータによると、現代小説に見える女性秘書の平均のイメージ像は、

大学卒業、二十歳代、美人、業務有能タイプで、東京の会社に勤める社長秘書ということになるようである。

a 学歴

データ	
35人中	12人
中高校卒	短大卒
9人	13人
大学卒	大学中退
1人	

b 年齢

データ	
42人中	1人
十代	二十代
31人	8人
三十代	四十代
2人	

c 容貌

データ	
67人中	47人
美人	その他
20人	

d 性質・能力

データ	
74人中	12人
家庭夫人タイプ	業務有能タイプ
25人	11人
コケティッシュタイプ	?
26人	

e 勤務先・専属・勤務地

データ					
74人中					
勤務地		専属		勤務先	
53人	東京	28人	社長	57人	会社
11人	大阪	14人	秘書室	7人	銀行
3人	神戸	8人	専務	10人	作家など独立自営業
1人	横浜	8人	作家など		
6人	他	16人	他		

日向方斎氏、阪急の清水雅氏、池田首相の秘書官だった宮沢喜一氏、元アメリカ大統領の秘書官キッシンジャーらを挙げる。そしてこのような立派な人物が秘書から輩出している反面、産業スパイもどきの仕事もしなければならず、大変危険な仕事でもあるというのである。その広瀬は、有能な秘書だった友人が目の前で発狂した経験を持ち、彼自身もある汚職事件の容疑で、厳しい警察の取調べを受けたことがあった。社長秘書としてすべてを知悉していたので、洗いざらい告白し、または取調べ室の窓から体を空中に飛ばしたいという衝動にかられながら、秘書としての職責に生きることを決意して、窓の幻影を追っばったという。しかし一切を妻に話すことが出来ないところから焦ら焦らして妻にあたり、撲って転倒させてしまう。妻はその年、急性の心不全で急死するが、広瀬は秘書でなかったら妻を殺しはしなかったと後悔の言葉を吐く。佐保子は憧れのこの秘書室長が例のクラブに出入せず、何かに激しい怒りをもっていることだけは心情的によくわかるのである。

(4) 佐保子の先輩秘書細田弘子の仕事や佐保子への言葉を見よう。

秘書にはバロン・デセー（気象観測に使う風船）をあげてその反応から各種の情報をうるという仕事があるとして、社長の密命を受けた弘子がそれを行うところがある。即ち社長は仮病をつかい、幹部の動きを見ていて、自分の斃れたあと専務側に就きそうな人間を徐々に排除して、次期社長予定の息子のガードを固めるというものである。その弘子は「秘書というものは常に秘密を守れないようでは秘書の資格はないのよ」と佐保子を諭し、ひとつの話をする。それはある会社の秘書が帰宅して母親に、社長のところへ来たアメリカA社の極東部長が映画俳優の誰それによく似ていてハンサムだったと話す。その男のことを母親が手芸のサークルで話し、それをまたその秘書の会社のライバル関係にある会社

の部長夫人がきいて、夫に何気なく話す。部長はその間の事情を調査、まき返し作戦にでて、ライバル社の計画を成功寸前で駄目にしたというのである。これは、どこでどう結びつかわからないから、絶対に口外してはいけないという忠告であった。また豊臣秀吉の天下取りは名秘書石田三成がいてこそ成ったが、その三成の滅亡が不用意なことばによったものであったことも佐保子に聞かせるのである。

以上、加賀爪佐保子の接する人々の秘書観、秘書論の大体にふれたが、秘書の仕事と、役割の重要性を語ることにこの作品はかなりの分量をさしている。秘書の仕事が、人間性をも損う残酷さをその本質に有し、悲劇を孕んでいることも、企業のもつ非情性も、全く小説の中のことだけでないのは、重大汚職事件でしばしば秘書の自殺が報道されることがあるのと思ひ合われる。小説はフィクションながら、現実のものとなりかねない人生の要因を、しばしば鋭く摘抉して見せてくれるのである。この『秘書室』に描かれるセクレタリークラブは、そのような例の極端なものである。

最後に、佐保子とそのAからIまでのすべての条件を結んで一つの像をつくると、現代のエグゼクティブの理想像であり、広瀬室長と重なるという、全米秘書協会の会員となるための秘書の条件が出ているので、それを記す。

- A 心理研究家であること
- B 政治的要素をもっていること
- C 外交官的要素をもっていること
- D 調査のエキスパートであること
- E 記憶力のよい文筆家であること
- F ビジネス関係の法律に明るいこと

きか社長名にすべきか。先方によっては檣を辞退するところもあるからうけとってもらえるかどうか？ そのへんの手配もしなければならぬ。

等々である。

(2) 是原院長が佐保子に聞かせたり、見せたりした点に移ろう。院長は「秘書のことをセクレタリーという」につづけて「英語で秘密のことをシークレットという。セクレタリーは英語のシークレットからきている。秘書、つまり秘密を知っている男だ。この頃では女の場合もある。秘密は、会社の秘密もあり、社長個人の秘密の場合もある。秘密と知っていて、しかもそれを絶対に口外できない人間、それが秘書、セクレタリーだ。知ったことを洩らさないこと。随分辛抱のいる仕事で、誰にでもできる仕事ではない。……」と佐保子に説き聞かせるが、これは連れられて行った日本秘書学院の三階の異様な別世界的光景を前にしての院長の言葉である。そこはホテルのロビーそっくりの所で、毛足の長い絨毯、吊りさがったシャンデリアの豪華さ、上品なBGMの流れ、エアコンディションされた、香りさえいつているように思える空気、広いフロアに十人を越す人々がいるが、思い思いバラバラの姿勢。それらの人々を三菱電気の社長秘書、浪華銀行の頭取秘書と院長は教えるが、よく見ると着ている服とその風采が立派なだけで、彼らの目は全く光りがうせ、痴呆とかかわるところがない。さらに四階でみた光景に佐保子は思わず嘔吐しそうになる。すなわち、「男が男を愛し、裸形の男が鞭うたれているかと思うと、男が女の背にまたがり女の頸を噛んでい」る淫靡な光景であった。地獄を見た悪寒で震えている佐保子に院長は次のように言い聞かせる。

「秘書は、気持ちがいいになるか、気持ちがいいにならないためには、ここへ

きて、気持ちが以上の行為をして発狂することを防いでいる……」と。さらに院長は「自分が金もうけのために、このクラブを経営しているのではなく、外ではエグゼクティブとよばれるにふさわしい紳士の彼等が、紳士であることを保つために、一時的に発狂し、人間以下の破廉恥な行為もする。……彼等が一人の人間に戻ることが許される唯一の場所がここ」と。そしてこの秘密のセクレタリークラブは会費をとらないかわりに「彼等がここでわめき呪詛する言葉——日本の一流企業のいわばトップシークレットを耳にする。それを集めると日本の、時には世界の最高の秘密さえ知りうる。」——といつて是原は自分が単なる街の秘書学院院长でないことを佐保子に示すのである。

(3) 全重役にそれぞれについている秘書を統括している秘書室長広瀬貞夫にふれる。佐保子の是原先生とはどんな方かとの問いに対して、広瀬は「危険な人物」で怖いことをしていると、次のように話し出す。

「……秘書は仕事の性質上、鬱屈を愚痴という形で発散さす訳にはいかない。彼が知れたこと、彼が大声をあげて鬱憤をはらしたいことは往々にしてその会社の存亡にさえかわりのあることが多いからだ。」といい、その発狂寸前にある彼らの鬱屈したものを爆発させる場所を是原は提供、彼らは発狂するかわりにけだものになり、人間としての尊厳を自ら汚す行為をし、秘書としてあかしてはならないことを吼えたと、けだものの時間をもつことで、会社では有能な秘書、家庭ではよき父、よき夫でいられる。正気なのは是原だけ。彼の耳にさまざまな企業のトップシークレットが入るが、そのようなクラブの経営を、是原は杜下商事のためと称していると佐保子に聞かせる。

さらに広瀬は軍隊の参謀、副官にあたる企業の秘書の役割の重要さにふれ、名秘書と謳われた人々、古くは三井家の中上川、現在では住友の

Ⅲ 秘書についての論議

以上、作品に描かれている女性秘書像について、いくつかの観点を導入することで小説家のもつイメージを結晶することが出来たと思うが、ここではさらに、小説家が作中で秘書の仕事や役割について、登場人物にいわせているところに注目し、その秘書観ないし秘書論に触れておきたい。代表作として『秘書室』を取り上げることにする。

余暇を利用して高給を手にする近道！

新時代の花形職業。

今すぐ日本秘書学院へ！

右はある新聞折込広告の文面である。これに付け加えて「秘書は近代ビジネスを支える発展性のある職業で、有能な秘書は高給でひっぱりだこである。」という説明を見た女主人公加賀爪佐保子は、努力次第で修業年限の短縮ができるし、夜間部もあり、入学金、授業料も出せない額ではないので、即座に入学を決意する。彼女は中華料理店に勤めながら夜学に通い、人が二年かかるなら自分は一年でと、持ち前のフアイトをもちやす。熱心に通って講義を聞き、同じなるなら「日本一の秘書になろう！」と目を輝かせるのだが、秘書学院に通い出して二月もたっていないのに、是原嘉治と名乗る院長の世話で、思いがけず杜下商事の社長秘書となる。それは彼女が、卒業したらどこへ就職したいかと聞かれて、大きな会社の名前ただひとつ知っているのを挙げた会社である。理由はときかかれても答えようもなかったが、翌日入社試験もなく簡単に採用が決定していた。この裏には、加賀爪という珍しい姓に気づいた院長と

杜下社長の密談があった。そして太平洋戦争末期を背景に、彼女の祖父で軍需工場の監督官だった海軍少尉加賀爪郁文の死の謎と、それから大阪心斎橋デパートの貴金属売場の森下幸助、杜下商事の専務大野辰次、そして是原らの暗い過去があかされてゆくが、その複雑なストーリーの展開はさておき、ここでは語られる秘書論や、佐保子の経験する秘書の実態等に限って触れることとする。

(1) 日本秘書学院において佐保子がノートをとった講義は、次のような内容である。長くなるが一部を引用してみよう。

会社の最高幹部がいかにして最高のコンディションで仕事ができるか、そのコンディションづくりをするのが秘書の役目だ。

だから有能な秘書は高給で雇われるのだ。これから秘書の役割はますます重要さをましてくる——というのは、これからの会社はテクノクラート時代にはいるからだ。

と。そして情報時代といわれて氾濫している情報を選別するための経営技術集団、それがテクノクラートで、その集団の中で最も重要なのが秘書室の仕事だと説く。また講師は「イトウニツラサンキテン」という言葉について、「一頭二面三機転」と黒板に書き、次のように注釈をくわえる。

頭がよくて顔が美しく、しかも機転がきかなければ秘書はつとまらないということだ。秘書は毎朝必ず新聞をすみからすみまで読まなければならない。特に見逃してならないのがいわゆる名士の死亡記事だ。新聞にのる程の名士ともなれば何らかの形で君達がこれから勤める会社の社長と関係がある。その人が死んだことを社長に報告するのは当然だが、社長が通夜に出席すべきか、それとも告別式に参列しなければならないか？代理では失礼か。檯は社名でだすべ

う。

一方塙佐和子は、今までの自己の経歴による知識経験をフルに活かして、加納のための最高の秘書たらんと努めながら、作家の仕事の本質をついに理解できず、結果的に作家の秘書失格の場合が、拡大化されている例といえる。

c 調和の問題

秘書がその能力を十分に発揮できる条件として秘書と上司とのかわり方が大事になってくるようである。秘書の肉体を相手に提供して、商談を有利にまとめようとした『光の肌』の大竹通産の専務、また『企んだ札束』の正和相互銀行社長は地方銀行への昇格に執念を燃やす余り、仕事の裏に勢力を張る暗黒街のドン笹村老人への恐怖が焦燥感となり、女秘書へそれが向けられ、秘書を連日社長の狂態の犠牲にするなどは、上司として余りにも逸脱した例であろう。秘書がいくら上司のために粉骨碎身すべきものであるとしても、その仕事にはやはり限界があり、やたらに拡大されてはならないはずである。

秘書と上司の理想的なかわり方のひとつの例として、再度『横領』における栗田口リサーチセンター所長栗田口俊明と、その秘書兼所員兼雑用係の奈良原静香の関係を見よう。栗田口俊明は京都大学出身のインテリで一流ブランドに身を固めている百八十センチ、三十六歳の「苦みばしった好男子」、奈良原静香についてはすでに触れた通りである。十二歳の年齢差があるものの、この二人は人の目に似合いのカップルと映る。しかし実際は人々が想像するような「ラブ・ストーリー」にはまず縁がない仲である。栗田口は少年の日に、自分の不注意で大やけどをさせて死なせた妹と静香とを重ね合わせて、生きていけば同じ年と胸

痛く思いつつ、静香の保護者として終始している。また静香の方も長兄に対する妹のように、その金遣いに注意して栗田口を閉口させたり、調査で朝帰りする彼女のために栗田口が作っておいだ食事を無邪気によることで、ボスの奥さんになる人はいんと得だとうらやんだりするような淡泊な間柄である。この栗田口は、臨時収入の十パーセントを静香には内証の彼女の定期預金に積立てているが、横領事件解決後の、調査費用と成功報酬として請求し受取った二億円についても、その十パーセントを彼女のために積立て「彼女が結婚する時に、妹の話をしたうえで」渡してやろうと思っている。こうして、栗田口リサーチセンターでは、所長と秘書との関係は人間的、兄妹的相互信頼でつながっており、静香は屈託なく明るく、伸び伸びと仕事をして、ボスの良きパートナーとして終始し、邪念もない。

このような上司と秘書との望ましいかわり方についてみると、
「翳りなき微笑」におけるホテルボヘミアン社長日暮二郎とその秘書田上みどりとの関係も、性質、能力の項で見たように、この例といえよう。日暮は自分が家庭、家族をもたない淋しさからか、みどりを肉親のように思い、このような娘こそ幸福にならなければならぬと温いまなざしを注ぐ。みどりもまた日暮を心から信頼し、内心では恋しく思っているのを、大学生の弟に見破られているくらいである。

この二組の例は上司の側に秘書に対する理解と人間愛があり、秘書の側にも信頼とわきまがあつて、安定した望ましい関係が成立することを示しているようである。

赤字決算の実際を示す裏決算書を押さえ、それと交換条件で、十三年間の慰労金として一億円を現金で要求、社長にその要求をのませる他、現金を届けにきた専務を誘惑して二人の情事をビデオテープにとっておいて、それを脅迫の手段に使って次々に専務に要求をしてゆく。しかも予め社長からの刺客に備えて、日本最大の警備会社の要人警備課に身辺のガードを頼んでいるという用心深さで、いわば会社への復讐を遂げる話である。天涯孤独の彼女は企業の強大な力を相手としながら、必死になって「悪女」を演じている。

次にもう一つの、女性秘書像として拡大されている例に『つむじ風』の塙佐保子を見たい。

四十八歳の作家加納明治は、妻と別れて新鮮な自由を味わったものの、身辺の世話に困って、新聞広告を出す。条件は、「若くて聡明な女性で、いろいろと細かいことに気が付き、しかもやさしい」ことであった。銚衡の結果採用した塙佐保子は三十四歳、従って「若いという条件には欠けていたが、フチナシ眼鏡なんかをかけ、つめたいような美貌の持主で、一見三十そこそこに見える」し、某女子大学英文科卒業で、卒業後は某能率研究所、栄養研究所、某ドッグ・トレーニング・スクール、某大学心理学研究室などの勤務歴をもつ女性である。またスマートなスーツをパリッと着こなしているし、言葉もきれいで丁寧なので、その点も加納は気に入った。

加納は彼女を塙女史と呼ぶことにし、良き小説を生産することに重点を置いた計画設計を頼み、生活の全部を一任した。全力を尽くすことを誓った女史の世話の仕方が、次第に変わってゆく。初期の「ういういしく、やさしく」、「恋人的」「母親的」な献身ぶりから、次第に改革は進行する。すなわち、

食生活―規則的に、味よりも栄養を主に。

睡眠―八時間、夏期には一時間の昼寝の厳守。徹夜の禁止。

酒、煙草―酒は週二回。一回一合。ビールならば二本。煙草は一日十本。

外出―不要のものの禁止。小説の取材には塙の付き添い。

住まい―便所を腰掛式に、台所をリビングキッチンに。

というわけである。塙女史の「理想主義的改革」ぶりに最初は満足していた加納も、その進行発展につれ、あわてはじめる。しかしいい仕事のためという大義名分を、契約のときに与えた言質を思うと、女史に従わざるを得ない。すべての雑用を女史が代行してくれるので、加納はひたすら小説をかくことに専念できるはずだが、「自分が人間でなく機械にでもなったような気がし始め」、身体は規則正しい生活と栄養食によって調子よく強健になり、頭脳も明晰となってきたが、逆に精神はへこたれてゆくのである。加納家の主導権は完全に塙女史が握り、彼女は自己の経験・知識を存分に活用して、加納のための理想的環境づくりに励む。それは「鶏を窮屈な場所に押しこめ、いろいろ束縛することによって、多数の卵を生産させる」ことに似ているのである。のちには加納も様々なレジスタンスを試みるが、結局成功せず、気の弱さから女史を餌にも出来ず、ますます彼女に頭が上がりなくなり、小説は書けなくなって児童ものに転向することになる。

この加納明治と塙佐保子の場合は、前記の秘書たちと違い、ボスより秘書の方が強力な支配者の位置を占める。こうなったのは、もともと加納自身が蒔いた種ながら、自己の生活の一切を最も理想的な「非人間的な状態」で秘書に徹底的に管理されてしまい。精神の萎縮をきたして、自由な創造力を喪失した作家の、そしてボスの側の悲劇ということになる。

え、ついでにカクテル・ドレス等二、三着の洋服も作らせておくことを命じる。しかも専務はこの費用を別途会計だという。

さて出社第一日目の美樹子が紹介されたのは営業部長沖田にだけである。人事課長は、専務秘書としての特別待遇で例外的な入社だから、組合には知らせたくないとのこと。「何だか日陰の身みたいで……」という美樹子の戸惑いと疑惑は、人事課長に連れられて着物や洋服の注文をした時、さらに拡がる。柄・生地・スタイルまで課長が勝手にきめ、寸法をはかるときだけ美樹子が必要としたからである。彼女は自分が「専務秘書」という名の、お妻さん」にさせられるのではという疑問を課長にぶつけたが、大笑いされて、心配が解消した思いになる。

一週間は専務や営業部長に都内の有名な場所を案内され、どこへ行っても物怖じしない訓練を受けたのちは、美樹子は高級レストランや料亭での食事、生地も仕立てもよい服装、前の勤務先の二倍の給料等に満足し、勤めを替えたことをよろこぶようになっていた。

三週間過ぎたころは、美樹子は自分の本当の役割が「取引の場を飾る花」とわかってくる。ただ黙ってその席へ坐り、相手方の顔を見つめ、ときに笑顔を浮べる……といった任務である。

そのうち「社運をかけた取引」が、築地の料亭で行われるのに彼女は同席する。商談の相手のQ国人三人のうち、美樹子に視線を投げかけてくる中央に坐っている男アイトナ氏の接待を課長から頼まれる。彼女は、大竹通産が自分に高給を払っていたのは、実はこのためかと思うが、衝撃は受けず予感していたようにさえ思う。取引を成功させれば、自動車を買ってくれることになっていたし、「待遇もさらによくなるだろうという打算もなかったとはいえない」のである。

こうして相手のアイトナに身を任せているうちに美樹子は、Q国賠償

使節団との交渉が成功したと専務から聞かされる。一方アイトナは美樹子に夢中になって結婚を迫り、承知しないと日本商社が美しい日本娘を餌に賠償で金もうけをたくらんだ事実を手記に書いて発表するとおどす。好きでもないアイトナにずっと束縛されたくない思いが募って遂に殺意を生じ、ガスのコックを開いて、自分で睡眠薬を飲んで寝入っているアイトナを後ろに彼女はその部屋を出てしまう。

この事実を彼女は小石専務に打明けて助けを求めるが、彼女が大竹通産の社員だったという証拠は何一つないと冷たい。そして個人的にアイトナと知り合い、個人的理由で殺したことを警察に言った方が、検事や裁判官から同情されるとし、自首をすすめるだけである。

その後美樹子は、賠償使節団側が己れにとっても汚点のこの事件で、日本警察に協力しないこともありうるし、かかわった料亭のおかみ達も口が固いものだという島晴代の判断に組みしてその提案を入れ、偽装自殺をするために遺書をかき、買ってもらったヒルマン五九型5や9571を晴海の岸壁から海中へ落したのである。この車に乗っていたアイトナと彼女を覚えていた給油所の係の証言もあったが、日本警察は十分な証拠が固められない様子で話は終る。

この話は、大竹通産の東南アジア賠償にからむ陰謀のかげで、犠牲にされてしまった専務秘書野上美樹子の悲劇である。その美貌とスタイルの良さと語学堪能という長所が、あだとなり、企業の欲望に利用されるだけ利用されて、結局は捨てられてしまった例といえる。

このような秘書の悲劇は『冷血集団』の岡本恭子や『歪んだ札束』（門田泰明）の日高や『凶悪のラストベッド』の池上京子らにも見られる。池上京子の場合は犠牲になりつ放しではない。十三年間社長秘書兼愛人として、社長に肉体を奪われつづけた後、社長の入院中に、会社の

- (3) 部外会合の設営、運営
5 その他

- (1) 新聞その他の情報資料収集
(2) 傍系会社関連連絡
(3) 随行世話
(4) 特命事項の遂行等

さてこれらは、生徒の加賀爪佐保子にとって「何度読んでも意味のわからない言葉の羅列であったが、読書百遍意自ら通ずという古諺もあるように、わからないまま何度もうりかえし読んでいる中に、秘書のイメージが何となく佐保子の頭の中に描き出され、自分の前途が急にバラ色に輝いてみえた。」という項目である。

ほかに『湿地帯』でも、大同銀行秘書室の業務として、役員の日程管理・スケジュール作りを第一とし、文書課の仕事、取締役会に関連の事務局的仕事、役員の健康管理、健康診断、人事課のやる年金の扱い、各種表彰、円満退職者への慰労式典、功労者が死亡した際の行葬、役員に代っての仕事、さまざまな面接者の処理等をあげている。

他の作品に見える女性秘書の業務もこれらの中に含まれているといつてよい。

b 拡大されたもの

小説の中の女性秘書は、aに挙げたような秘書としての一般業務の従事者として終始するだけではないのは、いうまでもない。時に極端にデフォルメされた秘書のありようや活動が示されることがある。その例の二、三について、それぞれの様態を見ることにする。

『光の肌』の野上美樹子は、高校卒業後Mデパートのネクタイ売場に勤

めるかたわら、英会話学院に通って一年になる。本当は大学の英文科に進み、将来は貿易会社に勤めたい希望があったが、父の死などで諦めたのである。しかし美樹子の英会話の実力には「男子社員たちも一目置いているほど達者である。車の運転についても教習所に途中まで通い、運転免許を取ろうと思えばすぐとれるはずになっていた。高校の友人でバー・シボレーのホステスである島晴代が、お店にくるある会社の人事課長から頼まれているという美樹子にびったり条件のあう仕事を持ってくる。待遇は、諸手当別で、給料が四万六千円、仕事次第でどんどん昇給、支度金も十万ぐらいいまでなら出すという話。美樹子のMデパートの給料と余りにもかけ離れすぎているし、「得体の知れない、不気味な話を聞かされたような気」で、警戒しながらも、好奇心は動く。「聞き捨てにすべくには、余りに条件がよいのである。仕事の種類は専務秘書という。美樹子はまだ職場を変える決心をしたわけではないが、その話の大竹通産の人事課長天河誠造に会う。日ホテルのロビーで、「見合いのような雰囲気」の中で天河課長に口説かれ、彼女も「せっかくの幸運をのがしたくない」と思い、反面「どこかに畏が」とも考えたが、翌々日承諾の電話をしてしまうのである。

会社で会った小石専務は肥満型で腹の出た五十五、六の男で、ソファーに腰掛けた美樹子に脚を組ませるといふテストを行い、眼鏡にかんって採用決定となった。専務の説明による美樹子の仕事は渉外関係で、専務が出歩くときに一緒に従うということである。そういう仕事の性質上、「現代の最先端を行く女性にふさわしい化粧法をマスターすること」が必要とし、給料が男子社員の平均ベースより多く、別に化粧手当が出るのもそのためという。取引先が外人なら、日本の着物は何よりも豪華に見えるものらしいからと、人事課長に、美樹子を連れて、着物をあつら

敏子・絹子・恭子・秋山ミドリら、そして作家個人の秘書に加能明治の塙佐和子、同じく藤綱令一の南条英子、また石和田運輸大臣秘書に塚本邦代が登場している。

次に勤務地を見渡すと、東京が八割を占めている。大手筋では大同銀行・朝日銀行・世紀火災海上保険・三国物産・極東重工業・杜下商事・共和商事等である。東京以外は少く、『あいつも隠した』の貿易会社は横浜、『黒い船渠』の世界造船は神戸、『庶務課長』（咲村観）の近畿運輸開発も神戸支店が舞台、『成り上りの勲章』のゴールド・ベアーズ・フードは大阪である。さらに『老人の眼』の北国デパートはS市とある程度。『翳りある微笑』のホテルボヘミアンは宝塚となっている。『つむじ風』・『悪霊の午後』もともに東京を主舞台としている。

データ											
41人											
勤務先				専属		勤務先					
32人		東京		16人		社長		29人		会社	
1人		大阪		7人		秘書室		5人		銀行	
2人		神戸		4人		専務		7人		作家など	
1人		横浜		4人		所長					
5人		他		2人		会長					
				3人		副会長					
				5人		作家など					

II 女性秘書の業務

a 一般的なもの

多少の差はあれ、女性秘書登場の作品では、その業務を具体的に挙げているのが約半数ある。そのうち『秘書室』が最も詳しい。それにはこの作品の女主人公加賀爪佐保子が入学した、日本秘書学院のテキストの、

秘書の実務という項目を掲げているのである。箇条書の項目をそのまま紹介しておく。

- 1 役員の庶務関係書類の整理
 - (1) 訪問客の接遇
 - (2) 部内、部外との連絡
 - (3) 日程スケジュールの管理
 - (4) 役員室、会議室、応接室の管理
 - (5) 役員の食事の世話
 - (6) 外出時の配車、旅券、宿泊の世話
 - (6) 慶弔、贈答、寄附等の管理
 - (8) 団体の仕事、関係者との打合せ
 - (9) 叙位叙勲の申請等
- 2 役員の経理関係処理
 - (1) 報酬、賞与、税務計算
 - (2) 諸経費の処理
 - (3) 出張経費処理
- 3 役員の文書管理
 - (1) 一般文書の起案、発受、口述筆記
 - (2) 重要文書の起案、通報、管理
 - (3) 稟議書、上申書、諸報告の受付連絡
 - (4) 部外あいさつ状の作成
 - (5) 文書の整理
- 4 会議、会合
 - (1) 取締役会、常務会の設営と議事録作成
 - (2) 幹部会設営

ネジャー時代に部員のためにマッサージを習得していたが、肩こりのひどい三洋建設の社長がその話をきいて、マッサージ専門秘書としている。祐子は『いかにも社長秘書らしい丁寧な、それでいてはきはきた口調』の持ち主。しかし肉体でお金を貯めようとする下心をもつ。半年ぐらい体をもませていた社長は、彼女の好色さに気づき、彼女の誘惑にのるのだが、「娼婦より娼婦らしい若い娘」を自分の肩だけでもませていないで、商取引の種にしようと思い立ち、仕事を依頼している保守党の大物議員に提供する話となる。

このようなコケティッシュなタイプの例として、ほかに『濁流の花』の矢奈瀬久美、『銀行破産』の尾崎敏子、『凶悪のラストベッド』の池上京子らが見える。

そして、語学力、速記などの能力あるものをあげれば、『光の肌』の野上美樹子、『マッハの謀略』の細川京子、『凶悪のラストベッド』の池上京子、『眩い巨塔』の松方則子、『黒い船渠』の長谷川みどりらは英会話、『銀行破産』の尾崎敏子は同時通訳される学会の研究発表の速記である。また秘書のライセンスを持ち、「俄か秘書とはちがう」のは『敵意の環』の北村杏子である。さらに『つむじ風』の塙佐和子は、某女子大学英文科卒業後、某能率研究所、栄養研究所、某ドック・トレーニング・スクール、某大学心理学研究室などの勤務歴を持つ頗る有能な秘書である。

データー		41人中	
4人	家庭夫人タイプ	13人	業務有能タイプ
6人	コケティッシュタイプ		
18人	?		

e 勤務先・専属

四十一人の秘書についてまず勤務先を見よう。銀行では大同銀行に吉倉つや・石井恵子・仮谷芳江、正和相互銀行に日高・朝日銀行に片山眞理子。事務所、研究所では、経営研究所に久保田里美、栗田口リサーチセンターに奈良原静香、建設事務所に相沢笙子。他に作家や大臣を勤務先としているものが三人いるが、それらについては後にふれる。あとはいわゆる会社が圧倒的といえる。損保業界の名門中の名門世紀火災海上保険に中川玲子ら、電機業界のリーダー的存在極洋電機に下条陽子・村野厚子、航空機専門メーカーの名門極東重工業に細川京子、旧財閥系の巨大商社三國物産に尾崎敏子、十大商社の一つ杜下商事に加賀爪佐保子・細田弘子・金本起代子・伊藤洋子ら五人、日本三大造船の一つの世界造船に長谷川みどり、東日本最大級の流通企業う、セオリーに池上京子、東日本スーパー業界の強力リーダー南部ストアに藤原治子、外食産業中群をぬくゴールド・ベアーズ・フードに岡井陽子がいるが、これらは一流中の一流企業で、その他の会社も入れると、当然ながら秘書の勤務先の半数以上を会社で占めている。

また専属は、社長秘書に岡本恭子・松方則子・藤原治子・日高・毛利敏江・中川玲子・田上みどり・関口高子・村野厚子・池上京子・細川京子・岡井陽子・加賀爪佐保子・細田弘子・宮沢祐子・矢奈瀬久美がおり、会長秘書に三原伸子・片山眞理子、副社長秘書に伊藤陽子・林田・久山紀子、専務秘書に下条陽子・長谷川みどり・野上美樹子・金本起代子、所長秘書に久保田里美・奈良原静香・戸田克子・相沢笙子がいる。また支店長秘書に安田貴子、部長秘書に北村杏子が見える。

その他秘書室(課)勤務には、吉倉つや・石井恵子・仮谷芳江・尾崎

アン」の社長日暮二郎が自分の秘書として彼女を採用した理由は、その明るく清潔さと正直とが気に入ったからであった。ホテルボヘミアンが「大きなホテルだが、一流ホテルではない。まだ一般に、そんなに名は通っていない。だから良い秘書を得るために」給料を良くした募集に対して、十数人の応募者のうちただひとり、面接試験で応募の理由を質ねられた際、給料が良いことをはっきり挙げたのが田上みどりであった。日暮は彼女の雰囲気と正直さに打たれて、他に「才気走った女性も、一流の女優に匹敵するような美しい女性も居た」が、採用をきめたのである。みどりの明るい笑顔は外出から帰った日暮にとって「緊張がすうっと溶けるような気」がし、その清潔さについては日暮のちに、「女性と遊んだ翌日は、社に出て君の視線を避ける。」「君には男を恥じさせるような清潔感がある。」と冗談のように言ったものである。このみどりは大学の英文科を出ている知的で聡明な女性でもあるから、日暮に「時々思い掛けないヒントをくれることがある」。億の財産をつくり、ホテルを建て、その名は「ホテル界では眉をひそめて語られ」ギャング上りという風評さへある、いわば人生の裏表を知りつくした日暮が、「おやっと思う、新鮮な目」をもち、「時々事件がわからなくなると、みどりに意見を求める」といった日暮の良きパートナーでもある。三十五歳の日暮は、自由奔放な生活が続けたくて誰とも結婚する気はないが、「自分にもし真面目な弟が居れば、みどりのような女性を妻に世話したい」と思っているし、迂余曲折した事件の解決後、この小説の終りは、日暮がみどりとの結婚を思い描いて、初めて翳りなき微笑を浮かべたとしているのである。このような田上みどりは、結婚しても夫の良きパートナーとして暮らすであろう性質・能力の持ち主として描かれているといえる。

このような例には、『横領』において栗田口リサーチセンター所長栗田口俊明とのコンビで活躍し、明るく聡明で、頭の回転はやく、秘書兼所員兼雑用係を見事にやってのけ、所長に「ヘソを曲げられてやめられたりしたら、えらいことになってしまふ」と思わせるほどの有能な奈良原静香がいる。静香は栗田口の依頼された調査に関する事実を正確に把握するための、「ブレーン・ストーミング」のよなき相手でもあるし、聞きこみ、尾行なども進んで行って、所長をハラハラさせるところがある。前の田上みどりの描き方にくらべると、性質の良さに合わせて、有能さをかなりに浮き上らせているが、「いい嫁はんや」と人に見える。この事務所の家主で階下にレストランと喫茶店を経営し、栗田口とは甚敵である尾崎雄策も、この栗田口と静香の淡白な関係にやきもきし、月下水人をいつかつとめる心づもりでいるのである。

こうした田上みどりや奈良原静香のような描き方に対して、業務の有能さを前面に押し出している例としては『寝台特急北斗星殺人旅行』（斉藤栄）の塚本邦代があげられる。彼女は何者かが爆弾予告をしてきた寝台特急北斗星1号に乗って、北海道視察旅行を強行しようとする石和田運輸大臣と行動を共にする秘書の一人である。だが、彼女はそうした危険を前に他の秘書をひやかす余裕をもち、カンも鋭い。列車内のトイレで犯人と出あい、犯人から奪った時限発火装置のカプセルを秘部に隠してしまい犯人に刺殺されたが、この邦代の咄嗟の判断と素早い行動が、列車の爆破を未然に防ぎ、運輸大臣と多くの乗客を救ったのである。同様の、よく気がつき頭がよく仕事のできる秘書として、『濁流の花』の矢奈瀬久美、『うちの社長』の関口高子、『広報室沈黙す』の中川玲子、『冷血集団』の岡本恭子らがいる。

さらに『横領』の宮沢祐子の場合を見よう。彼女は大学の馬術部のマ

スタイルもいいし、センスもある娘で、その上美人だからスターになる素質十分よ。……」と言わせている。

さらに『凶悪のラストベッド』の池上京子については、色白の彫りの深い端整な顔、切れ長な涼しい目、大柄なスタイルを、『湿地帯』の阪谷芳江については色白、細身、細いウエストを、『眩い巨塔』の松方則子の「体格もよく／ちょっと混血のような感じの男好きのする美人」という点を、『デイスカウントの狂謀』の藤原治子の「豊かな体をした背の高い女／赤いドレスと薄いブルーのサングラスが女に似合って」いる点を、『離れ棲』（門田泰明）の下条陽子の「色の白い端整な顔／薄い唇がどことなく妖しい」点を、『成り上がり の勲章』の岡井陽子の「彫りの深い顔／妖しい笑み／大柄／シルクの白いブラウスの下で、はち切れそうな乳房が息衝いていた」点を、それぞれ指摘し、賞めている。

『秘書室』という作品は小説のタイトルも内容も注目すべきもののなかで、後に特に触れたいと思うが、この中に登場する三人の女性秘書の魅力を、それぞれ次のように記す。まず女主人公加賀爪佐保子については、愛人関係が噂される世界同時革命党の首領・カルロス目にうつる「豊かな胸許」を、彼女が在学している日本秘書学院院長は原嘉治の、彼女の母親綾乃と比較して評しての言葉「綾乃さんの色の白さを、小麦色にしたらそっくりだ。背は綾乃さんより大分高い。それだけ魅力的でもある。かた物の我が輩でもフラフラになりそうだ。」を見ることが出来る。また佐保子が勤めた同じ杜下商事東京本社の先輩秘書細田弘子についても「いかにも品が良く、年配だったが、洗練された美しさと、キャリアウーマンらしい厳しさの中に、しっとりとしたおちつきがその女性からは感じられた。」と佐保子の目を通して語られている。さらにこれも同僚の秘書金本起代子についても、「一際目立って美しかった／もともと

大柄で、目鼻立ちも混血ではないかと思える華やかさで、しかも彫りが深かったが、目の前の金本起代子はそのままステージの上にあげフラメニコを踊らせても似合いそうな感じ」と、佐保子は「美しいというより妖しい」彼女の魅力に唾をのみこんだものである。

このように美しい魅力的な容貌・容姿の持主がほとんどであるが、例外もないではない。『あいつも隠した』の毛利鈴江は、「醜女という程ではないが、俗に云う十人なみ」程度で、その上眉毛が黒く濃く、「眉毛から瞼の上にかけて、黒っぽい生毛がそらずに残されてい」るのが、「どう見ても、社長秘書と云ったタイプでない」とある。また「整った顔立ちをしているが、どこか陰のある冷やかな女」として登場するのは『マッハの謀略』（門田泰明）の細川京子である。

以上の女性秘書たちを描く作家のイメージの中に、背の高さが加わり、大型に造型されるのは、現代の若い女性の平均身長伸びと無関係ではないかも知れない。その中で一例だけ「小柄で楚々として清純そのものという容姿」をしていて「役員秘書の中でも、取引先の来客にまで評判されるような美貌」とあるのは、『銀行破産』の尾崎敏子である。

左のデータの美人とは、「美しい」「美人」「美貌」「端正」等という、美を直接的にあらわす言葉を特に用いている例のみをあげた。

データ		
41人中	美人	24人
	その他	17人

d 性質・能力

まず『翳りある微笑』の田上みどりを見よう。宝塚のホテル「ボヘミ

データ	
20人中	中高校卒
6人	短大卒
5人	大学卒
8人	大学中退
1人	

b 年齢

年齢では二十代が中心である。そのうち、二十代前半のものに『うちの社長』（源氏鶏太）の関口高子、『横領』の奈良原静香、『巨きな歩』（清水一行）の恭子、『黒い船渠』の長谷川みどり、二十代半ばのものに『広報室沈黙す』（高杉良）の中川玲子、『横領』の宮沢祐子、『銀行派遣役員』（広瀬仁紀）の片山眞理子、二十代後半では『湿地帯』の飯谷芳江、『冷血集団』（清水一行）の久保田里美、『濁流の花』の矢奈瀬久美、『敵意の環』の北村杏子、『ひとひらの雪』の相沢笙子ら。そして三十代では『凶悪のラストベッド』の池上京子、『成り上がりの勲章』の岡井陽子、『秘書』の絹子、『湿地帯』の石井恵子。四十代では『湿地帯』の吉倉つや子、『広報室沈黙す』の三原伸子の二人。また十代の秘書としては『非常階段』の戸田克子が挙げられる。

こうして見ると、単に二十代の若い女性秘書が専ら扱われているというわけではなく、三十代、四十代のベテラン秘書の登場の六例も看過できないようである。

データ	
19人中	十代
1人	二十代
12人	三十代
4人	四十代
2人	

c 容貌

小説に登場する女性秘書の容貌については、それぞれに多く美点を挙

げて説明、描写につとめているのが一般である。その挙げている点に注目するとき、小説家たちのイメージする女性秘書の容貌というものが浮き上がるようである。その点を列挙して見ると、

色白 細面 丸顔 日本的目鼻立ち 優しい顔立ち ふくよかな顔立ち エキゾチックで彫りの深い 切れ長の涼しい目 大きな瞳 鼻のかたちのよさ ひきしまった薄い唇 額の生え際の美しさ 笑顔 愛嬌 歯ならびの良さ 透きとおった肌

等とある。この中「色白」は九例と最も多く、「色の白いは七難隠す」という諺が現代に生きているように思われる点である。ほかに二例以上ある点は「細面」「彫りの深さ」「薄い唇」「額の生え際の美しさ」等となる。

容貌だけでなく、容姿も一緒に挙げられることが多いが、その点では、背が高い 大柄 八頭身 細身 均整のとれたスタイル 長い髪 豊かな胸元 肉付のよさ

等が見える。このうち背の高い大柄の者の例は十一例もあり、反対に「小柄」の例は一例のみである。

これらの容貌、容姿についての具体的な例をいくつか挙げる。例えば『老人の眼』の秋山ミドリについては「背の高いエキゾチックな容貌／彫りの深い顔が匂うように笑っている／雪国の女らしい透きとおった肌が桜色に染まっている」と記し、『横領』の奈良原静香については「私は美人よと、意識過剰になったことがないだけに、静香の美貌は高慢さのない落着いたもの／背は高いけれど、ほっそりとして大人し気ないいい嫁はんや／その気になればいますぐだってタレントにでも女優にでもなれるわ。」という人々の賞賛をあげ、また調査のために静香が仮名でホステスとして半月ほど潜入していたクラブ・シャトーのママに「……

そしてその間に三十篇を得た。そこで今回も前回と全く同じ調査項目を立て、同じ方法をとって、小説中の女性秘書の分析解明を試みることにしたのである。

調査した三十篇の主要な点に関する一覧表も、前回と同様に作成して文末に掲げておいたので、参照していただければ幸いである。

I 女性秘書の採用

小説中の女性秘書が、どのようにしてその職に就いたか、という点に触れているのは十三例に止まり、他の秘書の就任事情についてはかならずしも判然としない。その十三例のうち、新聞広告による募集に依じて選ばれたのは、『あいつも隠した』（黒岩重吾）の毛利鈴江、『翳りある微笑』（同）の田上みどり、『つむじ風』（梅崎春生）の塙佐和子の三人。知人などの紹介によるものを挙げると、『秘書室』（渡辺一雄）の加賀爪佐保子が、在学中の日本秘書学院院长の、『光の肌』（佐野洋）の野上美樹子が高校の友人の、『横領』（広瀬仁紀）の奈良原静香がそのボスの友人で大学助教授の、同じく宮沢祐子も知人の、『ひとひらの雪』（渡辺淳一）の相沢笙子が工務店の知人の、『悪霊の午後』（遠藤周作）の南条英子が亡夫の友人の、それぞれ紹介で採用されている。また『黒い船渠』（梶山季之）の長谷川みどりも伯父なる専務の縁故で同じ会社採用されている。そのほかには、他の職場からの抜擢による『老人の眼』（城山三郎）の秋山ミドリ、『成り上がりの勲章』（門田泰明）の岡井陽子、『非常階段』（梶山季之）の戸田克子らが挙げられる。

以上の例の限りでは、知人友人の紹介ないし縁故による採用が最も多

いといえよう。

次に、a 学歴、b 年齢、c 容貌、d 性質・能力、e 勤務先・専属という順に女性秘書の採用条件や資格を小説の中に見てゆくことにする。三十篇の小説に登場している女性秘書は、端役も入れるとすべて四十一人になる。ただし、作品がこのような条件について、四十一人のすべてに触れているわけではない。

a 学歴

まず高校卒業者に『あいつも隠した』の毛利鈴江、『光の肌』の野上美樹子、『濁流の花』（黒岩重吾）の矢奈瀬久美、『非常階段』の戸田克子ら五人。短大卒業者に『ディスカウントの狂謀』（門田泰明）の藤原治子、『凶悪のラストベッド』（同）の池上京子、『秘書』（工藤幸一）の絹子ら。『銀行破産』（広瀬仁紀）の尾崎敏子はミッシェン系。次に大学卒業者に『湿地帯』（清水一行）の仮谷芳江、『眩い巨塔』（梶山季之）の松方則子、『翳りある微笑』の田上みどり、『横領』の奈良原静香と宮沢祐子、『敵意の環』（清水一行）の北村杏子、『つむじ風』の塙佐和子ら。いずれも女子大学の卒業生。ただ『黒い船渠』の長谷川みどりは高校卒業後、スイスに留学し、大学は三年で中退となっている。中学卒業の『秘書室』の加賀爪佐和子は稀な例。

こうした例を見ると、学歴としての高校・短大・大学の扱い中、大学卒業生としているものは、高校・短大それぞれより多くなっている。しかも女子大学のみである。また短大・大学での専攻は、相沢笙子が美術、松方則子・田上みどり、池上京子、塙佐和子らは英文となっている。

現代小説に見える女性秘書（二）

原田 夏子*

はじめに

I 女性秘書の採用

II 女性秘書の業務

III 女性秘書の論議

おわりに

はじめに

外部からはその実態・実状が捕捉しにくく、従って解明のはかどらない女性秘書の種々の問題に迫る一つの方法として、小説に登場する女性秘書たちの様態を調べてみることを始めたのは、昭和五十九年の秋のことであった。そして、文庫本の解説目録などを頼りにして集めた小説のうち、

一 昭和二十年以降の作品であること。

二 日本の作家の作品であること。

三 現代日本の職場に現役の、日本女性秘書の登場する作品であること。

という条件をみたしている小説に限って扱うこととして二十三篇を得た。これらを調査研究の対象として、一先ず纏めてみたのが、「現代小説に見える女性秘書」（共栄学園短期大学紀要1開学記念論文集1985所載）であった。

その時扱った二十三篇の現代小説のうち、二十篇までが会社や銀行といった企業組織体を舞台としており、そこに描かれている女性秘書は、主人公であれ脇役であれ、それぞれの作家のもつ女性秘書のイメージを、かなり明らかにしていると思われた。と同時に、女性秘書についての問題の手がかりも、ある程度得られたように思う。

しかし、それだけに二十三篇という作品数ではなお物足りなく、さらになるべく多くの小説を集めて調査したいと心掛けつつ、今日に及んだ。